

---

# 深淵たる魔王その名は

神風大和

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

深淵たる魔王その名は

### 【Zコード】

Z9567Z

### 【作者名】

神風大和

### 【あらすじ】

ある男がクレイモアの世界に転生した。  
しかも男時代の戦士として。  
得てして半人半妖になつた男はクレイモアの世界で何をなそつとす  
るのか。

「ま、面白い方でいいか」  
・・・案外適当である。

## 第一話誕生（前書き）

21巻で感動して書き始めた。  
後悔はしていない！

## 第一話誕生

水をうつたような静けさを醸し出す空間。

例えるならば黒、壁も空氣も音すらも真っ黒に塗りつぶされ誰からも拒絶された部屋。

その光とは対極に位置するとも言える狭間の中で一つの生命が覚醒された。

「・・・・・」

しかし、その生命の他にも空間に溶け込むよつとしてもう一つ黒い影は存在していた。

「そろそろ目覚めるか。起きろ、既に手術は施された」

染みいるような黒服の男の声とともに台座の上に横たわっていた男が辺りを確認するように首を動かす。

「！」

「何處？」

「ふむ。田覚めたばかりまだ記憶が曖昧なようだな。お前はルシファー、此度の選定に選ばれたものだ」

「・・・・・」

「は？」

「はああああああああああああああああ！」

轟く叫び声とともに男の長い銀髪が微かに揺らめいていた。

「・・・・・」

あれから数年・・・・・ではなく数日。

最初は体の激痛に悩まされていたルシファーだったが数日たつた今ではそれもなくなり他の戦士と（・）呼ばれる（・・・・）者達と

一緒に体馴らしも含め訓練に耽つていた。

そしてやはりというか、驚かされたのはこの体のスペック。妖魔の一部を体に取り込んでいるとはいえ前世とは比較にならないほどの筋力、スピード、そしてスタミナ。

どれもが前世の自分であつた人間を遙かに凌ぎ圧倒的であった。しかし、個々においても体のスペックには差があるらしく原作でいたイースレイ、リガルド、ダフはまさしくトップ³に相応しい力を持つていた。

（まあ、やはりなんというか。この三人この時からすでに仲が悪いんだな。戦力的にスピードではリガルド、パワーではダフ、そして全能的なイースレイ。いいチームなんだけどなあ）

三人とも原作よりはまだ若く幼さが残る。

簡単に言うとイースレイは優男、リガルドは精悍な顔つき、ダフは・・・まあなんというか小太りなやんちゃ坊主みたいな？と、ルシファーは三人の戦士達の訓練の様子を見ながら呑気に考えていた。

「おい、ルシファーはやらないのか？」

前から先ほどまで訓練をしていたイースレイから声を掛けられた。

「んー？めんどいなあ」

本気でめんどうそうに言うルシファーにイースレイは呆れた表情を浮かべる。

「何言つてるんだ。この中で戦つていよいのはお前だけだぞ。ほら早く剣を持つて」

そう言つて大剣・・・クレイモアを此方に投げつける。

「まあ、少しくらいならいいか・・・」

ルシファーはそれを片手で掴み取り切つ先をイースレイへと向けた。

訓練場の空気が急に圧迫され戦士の目が一人に集中する。

（出来るならやり合いたくなかったんだけどなあ）

若干の白けが混じつた視線でイースレイを見る。

彼はその視線に気づき苦笑で答え、そんなことは知った事かとばかりに剣を構える。

(ちい！あの野郎め)

戦闘狂が……ルシファーは軽く呟いた。

「戦いはどちらか降参するまで。殺しは無し。でいいかな？」

つまり殺さなければ半殺しもありと言つ事か。

「ああ。問題ない」

無意識にルシファーの怒りのボルテージが上がった。

「では……行くぞ！」

先手必勝。

この短期間でどうやつたらそこまでのが手に入るのか、一瞬で距離を詰めてくるイースレイ。

振り上げてくる上段切りを軽く受け流し続けざまに放たれる蹴りをこれまで受け流し捌き続けていく。

他から見ればルシファーの防戦一方。

それは事実でありまたルシファーもそう思つてゐる。

しかし、ソレも時間が経つにつれ疑問が浮かび上がる。

何故あそこまで捌き続けることができる？

ルシファーはあらゆる方向から放たれる攻撃を全て受け流し捌いているのだ。

イースレイは強い。それはリガルド、ダフこの一人以外では他の追随も許さないほどに。

これまでの一騎打ちをしてきた戦士達はほぼ瞬殺か秒殺、リガルドやダフでさえあと一歩の所でいつも負けているのだ。

それを彼は……耐え続けている。

「くくっ、まさかこれほどに強いとは。君を見誤つていたよ

ふといースレイは心底楽しそうにルシファーを見ながら話しかけて來た。

「そうだな。俺もそう思うよ」

そう言いつつもイースレイは強い、手数が衰えるどころかさう

増えて行き威力も上がっている。

「とかまだ妖魔討伐も行つていないのでこじまでは強いとは反則だろう、と思う。

「でも、まだまだ足らなかつたな」  
スツ、イースレイが蹴りを放つてきたのを利用して斜めに入り足払いを掛ける。

いきなりの反撃にイースレイは驚き転びそうになるものの直ぐに体を反転させ反撃を開始する。

刹那 ルシファーアの動きが豹変する。

当たらない、切れど、殴れど、蹴れど、まったく当たらないのだ。  
それはさつきとは違う。

受け流し、捌くのではなく見切り攻撃の隙間へと入り込んでいく。  
「悪いが俺も半人半妖になつてから桁外れて強くなつてるのでな！」

放たれる一閃。

それは無骨ながら一切正確さを欠くことなくイースレイの溝内へとクリーンヒットした。

若干の鈍った音とともに倒れ込むイースレイ。

それを汗一つ搔くことなく疲れた表情を浮かべるルシファーアと唖然と見つめる他の戦士達。

たつた一撃。

それだけであのイースレイを破つた。

これは始まり。

長い長い物語のほんの序章に過ぎない。

## 第一話誕生（後書き）

まあ、主人公が一番反則ですけどね（笑）  
というか訓練生時代は男時代にもあつたのか甚だ疑問ですが、一応  
そういうことにしといてください。  
次回は妖魔狩り行きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9567z/>

---

深淵たる魔王その名は

2011年12月29日22時50分発行